

京都に隠れた意外な秘密を紹介します

不思議ふしぎ!?

金閣一枚板の謎



舍利殿・金閣 三階部分が「究竟頂」この床が一枚板だった

江戸時代の十七世紀後半、歴史家の黒川道祐が記した京都初の総合的地誌『雍州府志』に、金閣の三階部分である究竟頂について記した一文があります。「床三間四面なり。板一枚をもつて床となす」。金閣の三階は広さが三間四面、床板は一枚板だということです。これは驚きです。

三間四面というのは一辺が約五・四メートル四方の部屋



日本最大の樹木「蒲生の大楠」の圧倒的存在感まさに度肝を抜かれるとはこのことです

のことです。細かな計算は省きますが、この広さの部屋を一枚板で敷こうとすると、少なくとも幹周り二十五メートル以上が必要。これはとてつもない大きさです。

しかしこのことは当時有名だったようで、かなり多くの京都案内書でも採り上げられており、中には床板でなく天井板が一枚と記したものもあります。天井にせよ床にせよ、果たしてそんな巨木があったのでしょうか。

現在、日本で一番太い木は鹿児島県始良市にある

歴史や文化、全てが源流へとたどり着く古都。京都を知ることには日本を理解すること。

京都好きを大好きに

「蒲生の大楠」で、幹周りが二十四・二メートルあります。しかしこれでも金閣の床板には足りません。文献には江戸時代に同じ鹿児島県の指宿に、「指宿大楠」という巨木があったことが記録されています。

この木は幹周りが二十九メートルありました。屋久島の縄文杉(十六メートル)の二倍近い大きさです。これなら究竟頂の床板もとれそうです。この一枚板の存在は鹿苑寺では真実とされていますが、返すくも焼失してしまっただけが惜しまれます。考えてもみてください。日本最上の楼閣に日本最大の巨木から採られた一つの継ぎ目もない板が敷かれていたのです。

巨樹というのはこの地球上でもっとも長命な生物です。なかには数千年生き続ける樹木もあります。気の遠くなるような時を超えた巨樹はまた

底知れぬ靈力を纏っています。かつて仏像が一木から造られていたのはその力の故です。そんな力を持った樹木が金閣を支えていたのです。想像しただけでも鳥肌が立ちそうではありませんか。

ちなみに現在、世界最大の木はメキシコのトゥーレ・サイプレスと呼ばれる巨樹で、なんと幹周りが四十五メートルもあるそうです。(同志社大学嘱託講師 堤勇二)



世界最大の巨木「トゥーレ・サイプレス」の迫力これ一本の木です